

「望ましい友人関係」と「望ましくない友人関係」の要素について

-論文タイトルと要旨のテキストマイニング分析から-

戸梶 良輝¹⁾，岡田 倫代²⁾，古口 高志²⁾

1) 高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻 院生

2) 高知大学大学院総合人間自然科学研究科教職実践高度化専攻

Analysis of the Elements for Desirable and Undesirable Relationship among Children

-Text Mining on Titles and Abstracts on Published Papers in Online Database “CiNii” and “Google Scholar”-

TOKAJI Yoshiki¹⁾, OKADA Michiyo²⁾, KOGUCHI Takashi²⁾

1) Programs for Advanced Professional Development in Teacher Education

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University, Graduate student

2) Programs for Advanced Professional Development in Teacher Education

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University

要約

本研究では、不登校を予防するためには、望ましい友人関係を築くことが重要であることを踏まえ、「望ましい友人関係」と「望ましくない友人関係」の要素を抽出することを目的とした。友人関係を扱った22件の論文のタイトルと要旨をテキストマイニングにより分析した。階層的クラスター分析を行った結果、10のクラスター（共有様式、メンタルヘルス、不安・不満、自己開示、安心感、同調ストレス、自己理解、群れ、自尊感情、親密性）が抽出された。この抽出された要素を自分にとって肯定的な影響を与えるかどうかで分類することで、「望ましい友人関係」の要素は「共有様式」、「自己開示」、「安心感」、「自己理解」、「自尊感情」及び「親密性」が、「望ましくない友人関係」の要素は「メンタルヘルス」、「不安・不満」、「同調ストレス」及び「群れ」であることが示唆され、今後の課題として、抽出された要素についてのさらなる検討の必要性が挙げられた。

キーワード：友人関係，不登校予防，テキストマイニング，望ましい友人関係，望ましくない友人関係

1. 目的

近年、日本の学校現場では、不登校などの生徒指導上の諸問題が深刻化している。令和元年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果では、不登校児童生徒数は181,272人で過去最多となっており、年々増加傾向にある¹⁾。

不登校に至る要因としては様々なものが考えられる

が、上記の同調査結果によると、学校に係る状況の項目の中で不登校の要因として一番高い割合を示しているのは、小学校及び中学校ともに「いじめを除く友人関係をめぐる問題」となっている。このことから、学校生活を過ごす中で子ども達が友人関係を良好に保ち、親密な関係を築くことが不登校を予防する上で重要であると考えられる。この点に関して、友人関係に関す

る様々な先行研究から、親密な友人関係は、適応や精神的健康を支える上で重要な機能をもつものである²⁾とされている。また「率直な自己開示を通じて、相手との共通性を認識し、価値内容の相互確認を行うもの」である「チャム体験」が高いほど、学校接近感情が高い³⁾こともいわれている。そのため、小学生や中学生の時期に親密な友人関係を築くことは大変意義のあることだといえるだろう。

友人関係を扱った先行研究には、様々なものがある。例えば、「友達とのかかわり方に関する姿勢」と「自分がかかわろうとする相手の範囲」の2次元によって、青年期の友達とのつきあい方を4つのパターン（深く狭くかわるつきあい方、深く広くかわるつきあい方、浅く広くかわるつきあい方、浅く狭くかわるつきあい方）に分けた研究⁴⁾、青年期の友達とのつきあい方を16種類（嫌われないように気をつけている、ありのままの自分を出している、自分と合わない人ともつきあう、悩みの相談をする、相手を信じている、自己理解が深まる、好かれていたいと願っている、相手を独占しようとする、傷ついても本音でつきあおうとする、常に決まった仲間と行動する、励ましあう、相手を頼ろうとしない、深いつながりをもつ友人はつくらない、相手に尽す、共通体験で結びついている、目的に応じて相手を変える）に分類し、それぞれのつきあい方を「友達とのつきあいの深さ」と「相手との心理的接近の仕方」の2次元で分析し、発達的变化や性差を検討した研究⁵⁾、青年期の友人関係を「心理的距離」と「同調」の観点から類型化（独立群、個別群、表面群、密着群）し、各類型の特性を明確にした研究⁶⁾などがある。このように友人関係を扱った先行研究においては、現代の友人関係の様相について、多面的・多角的な視点から多くの検討がなされている。

しかし、これらの友人関係について扱った先行研究では、どのような友人関係が望ましいのか、または望ましくないのか明確になっていない点で、検討の余地があるといえる。例えば、先に述べた落合・佐藤(1996)⁴⁾の研究に関しては、青年期での友達とのつきあい方を16種類に分類し、その発達的变化や性差を検討しているが、どのつきあい方が望ましく、または望ましくないのかまでは検討されていない。不登校を予防する際に、友人関係について考える場合、どのような友人関係を築いておけば不登校予防につながるのか、また、どのような友人関係になれば不登校などの生徒指導上の諸問題に繋がりがやすいのかを明確にしておく必要があると考えられる。

以上から、本研究では、現代の友人関係において、どのような友人関係が望ましく、どのような友人関係が望ましくないのかについて、友人関係について扱った先行研究の論文タイトルとその要旨をテキストマイニングの手法を用いて分析し、その要素を抽出することを目的とした。

2. 方法

1) 分析対象

「友人関係」をキーワードとしたCiNii及びGoogle Scholarで検索した論文である。

2) 分析方法

論文のタイトルと要旨をテキストマイニングの手法を用いて分析した。使用したのはフリーソフトウェアのKH coderである。

テキストマイニングとは、膨大なテキスト（文書）情報の中から有用な情報を掘り出す（マイニング）ことで、定型化されていないテキストデータを、一定のルールに従って定型化して整理し、データマイニングの手法を用いながら、相関関係などの定量分析を行う手法⁷⁾である。

本研究におけるテキストマイニングの手順としては、まず得られた論文タイトルと要旨をマイクロソフトExcelで電子化した。次に、KH coderにExcelデータを入れ、抽出語を分析した。最後に、分析した抽出語をKH coderに搭載されている階層的クラスター分析を用いて、「望ましい友人関係」と「望ましくない友人関係」の要素を分類した。

3. 結果

「友人関係」をキーワードとして検索した結果、CiNiiでは約1,900件、Google Scholarでは、約33,800件の論文がヒットした。そしてその中から、親友関係や、友人とのつきあい方、友人関係の様相がわかるものを選定し、22件の論文を分析対象とした（表1）。

22件の論文のタイトルと要旨をExcelによって電子化し、そのデータをKH coderに入れた結果、5,820語が抽出された。しかし、抽出語の頻度（出現回数）の上位群には、「研究」、「結果」、「尺度」、「分析」、「因子」、「関連」、「検討」や「調査」などの論文タイトルと要旨に記載されている研究の方法に関する語が抽出されていた。

この結果は、「望ましい友人関係」と「望ましくない友人関係」の要素を抽出するという本研究の目的には

表1 「友人関係」をキーワードとした CiNii 及び Google Scholar での検索論文タイトル一覧

- ・同性の友達とのつき合い方からみた青年期の友人関係（長沼恭子・落合良行）
- ・思春期における友人関係の発達の变化の様相—親友関係 Chumship の形成度ならびにメンタルヘルスとの関連から—（長沼恭子・落合良行）
- ・青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討（風間淳希・平石賢二）
- ・大学内の友人関係における親密さと共有様式との関係（池田幸恭・葉山大地・高坂康雅・佐藤有耕）
- ・中学生の友人に対する信頼感と学校適応感との関連（中井大介）
- ・小中学生における親友関係の質と情緒の問題との関連（酒井厚・室橋弘人・菅原ますみ・松本聡子・相澤仁）
- ・大学生における友人関係の類型と適応及び自己の諸側面の発達の関連について（岡田努）
- ・青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向（高坂康雅）
- ・青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因（柴橋祐子）
- ・中学生における心理的ストレスの継時的変化（三浦正江・坂野雄二）
- ・青年期の交友関係における同調と心理的距離（上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護）
- ・現代青年の友人関係に関する考察（岡田努）
- ・青年期における友達とのつきあひ方の発達の变化（落合良行・佐藤有耕）
- ・青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化（榎本淳子）
- ・青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮設モデルの生成—（水野将樹）
- ・現代大学生の友人関係と自己像・友人象の関する考察（岡田努）
- ・現代青年の認知された友人関係と自己意識の関連について（岡田努）
- ・青年期における友人関係期待と、現実の友人関係に関する研究（鈴木素子・寺寄正治・金光義弘）
- ・チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響（田中良仁・吉井健治）
- ・前青年期の「chumship 体験」に関する研究（須藤春佳）
- ・現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究（岡田努）
- ・キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討（保坂亨・岡村達也）

適さないため、研究の方法に関する語などは全て「使用しない語」として指定し、分析の対象から外した。また KH coder では、複数の品詞が連続して一つの語を構成している場合、その語を最小単位まで分類して語が抽出される⁸⁾ため、強制抽出の方が望ましいと考えられる語については「強制抽出する語」として指定した。例えば、「適応」という言葉が抽出された場合、一見すると独立した語と考えられるが、「適応」という語の前後の文章を見ると「過剰適応」と書かれている場合が見られる。このような場合は、意味が全く異なるため「過剰適応」として強制抽出した。

「使用しない語」と「強制抽出する語」を指定して、改めて語を抽出した結果、4,634 語が抽出された。頻度（出現回数）が3以上のものは、54 語であった（表2）。頻出語1位は「友人」で100回、次に2位が「関係」で97回、続いて3位が「自己」で46回であった。

次に、抽出された語を階層的クラスター分析で分析した。その結果、10のクラスターが抽出された（表3）。

第1クラスターは「共有」、「親しい」、「葛藤」、「不安」、「懸念」、「親密確認活動」、「安定」及び「相互理解活動」で構成され、要素名を「共有様式」と解釈した。第2クラスターは「体験」、「Chumship」、「入れ込」、「メンタルヘルス」、「親友」及び「情緒」で構成され、要素名を「メンタルヘルス」と解釈した。第3クラスターは「異質拒否傾向」、「被異質視不安」、「低める」、「満足」及び「高める」で構成され、要素名を「不安・

不満」と解釈した。第4クラスターは、「気持ち」、「表明」、「配慮」及び「望む」で構成され、要素名を「自己開示」と解釈した。第5クラスターは「学校適応感」、「感覚」及び「安心」で構成され、要素名を「安心感」と解釈した。第6クラスターは、「ストレス」、「学校」、「信頼」及び「過剰適応」で構成され、要素名を「同調ストレス」と解釈した。第7クラスターは「自分」、「自分自身」、「自己」、「内面」、「関心」、「友達」及び「対人」で構成され、要素名を「自己理解」と解釈した。第8クラスターは「群れ」、「距離」及び「志向」で構成され、要素名を「群れ」と解釈した。第9クラスターは「自尊心」、「友人関係期待」、「学校接近感情」、「自尊」及び「適応」で構成され、要素名を「自尊感情」と解釈した。第10クラスターは「表面」、「他者」、「独立」、「友人」、「関係」、「深い」、「友情」及び「親密」で構成され、要素名を「親密性」と解釈した。

4. 考察

友人関係について扱った22件の論文タイトルと要旨を KH coder に入れ、語を抽出した結果より、頻出語の上位群には「友人」、「関係」、「自己」があることがわかった。本研究は、「友人関係」をキーワードとして論文を検索しているため「友人」と「関係」が上位に位置することは容易に想像できる。「自己」については、「友人関係」について扱った論文を分類する際、「友人

表2 頻度（出現回数）3以上で抽出された頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
友人	100	学校	7	内面	5
関係	97	葛藤	7	入れ込	5
自己	46	感覚	7	メンタルヘルス	4
信頼	20	友人関係期待	7	学校適応感	4
体験	20	友達	7	距離	4
満足	17	安心	6	群れ	4
親友	16	過剰適応	6	自尊	4
共有	13	学校接近感情	6	自尊心	4
適応	13	高める	6	相互理解活動	4
表現	13	自分	6	独立	4
親密	12	自分自身	6	表面	4
友情	12	深い	6	ストレス	3
ストレス	8	対人	6	安定	3
異質拒否傾向	8	不安	6	関心	3
情緒	8	望む 注1	6	懸念	3
他者	8	気持ち	5	親密確認活動	3
被異質視不安	8	思考	5	低める	3
Chumship	7	親しい	5	配慮	3

注1 「望む」は「望まれる」と「望む」を統合したものである。

関係の様相やその発達の变化についての研究、「友人関係が自己形成に与える影響や自己意識との関連についての研究」、「友人関係を対人場面として取り上げている研究」の3つに分類されていること⁹⁾からも、友人関係について考える際は、自己との関わりが重要になると考えられる。

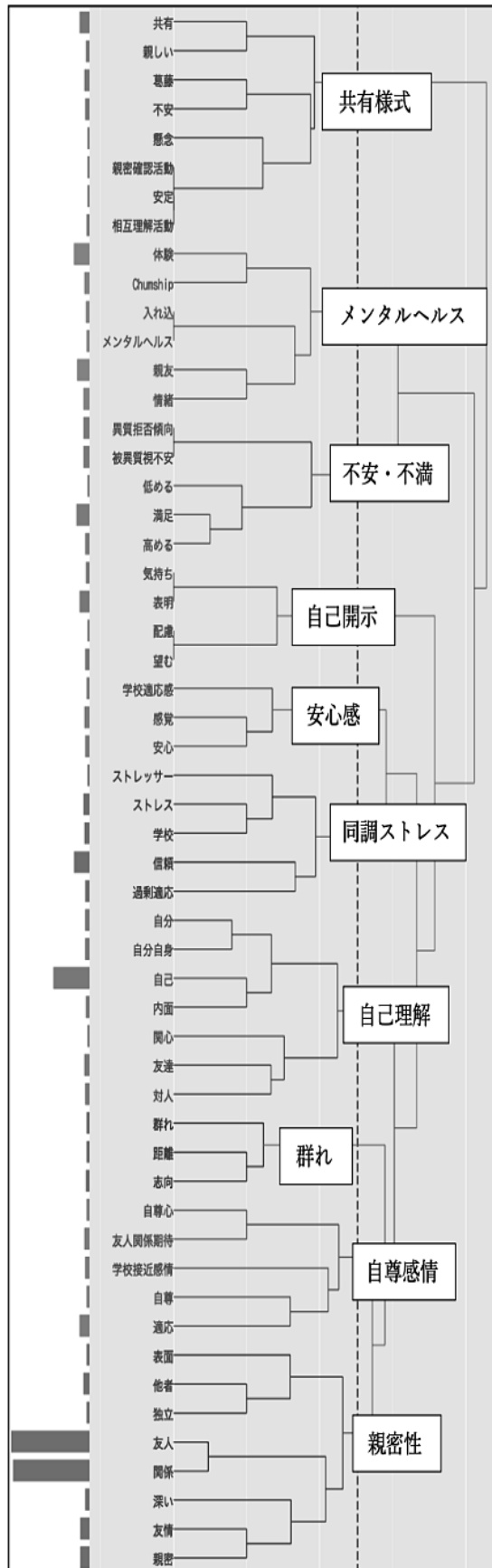
さらに、抽出された語を階層的クラスター分析にかけて、要素を抽出した結果から、まず「共有様式」については、クラスターの構成要素として「相互理解活動」、「親密確認活動」、「親しい」や「共有」などがあり、親しい友人は、悩みを打ち明けたり、一緒に行動したりするなど、様々なものを共有している関係であると考えた。これに関しては、友人との共有様式には「関係の共有」、「場の共有」、「気持ちの共有」、「意思の共有」、「物品の共有」及び「感性の共有」があるとされ、親密な友人関係は多様な内容を共有している関係であり、友人関係が親密になることに伴い、共有様式が多様になっていく¹⁰⁾といわれていることから明らかである。また、悩みや否定的な感情、物品を共有することは関係満足度を低めてしまう¹⁰⁾ともいわれており、構成要素に「不安」や「懸念」及び「葛藤」などの否定的な語があるのは、そのためであるのではないだろうか。しかし、悩みや否定的な感情を共有する

ことは友人と深い付き合い方にもつながるとされているため、共有は大変意味のあるものであるといえる。

「メンタルヘルス」については、構成要素として「親友」、「Chumship」、「入れ込」、や「情緒」などがあり、友人に対して、情緒的に入れ込むことがメンタル面に影響を及ぼすことを示していると考えた。これに関しては、中学2年生や3年生において、親密性体験は対人緊張を下げるといわれつつも、情緒的な入れ込みは逆に、対人緊張を高め、かつ、抑うつ傾向や摂食障害傾向も高める¹¹⁾とされている。このことから、友人へ過度に情緒的に入れ込み過ぎることは、メンタルヘルスに影響を及ぼすと考えられる。

「不安・不満」については、構成要素として「異質拒否傾向」、「被異質視不安」、「満足」や「低める」などがあり、友人を異質な存在と見なしたり、自分が周りの友人からどのように評価されているのかを気にし過ぎて不安を感じたりしている状態が、友人関係における満足度を低めることを示していると考えた。これに関しては、中学生男子と大学生男子を除いて異質拒否傾向が友人関係満足度を直接的に低めることや、大学生男子を除いて異質拒否傾向は異質視不安を引き起こし、高校生女子では、異質拒否傾向が被異質視不安を媒介として友人関係満足度を低めると報告されてい

表3 階層的クラスターと要素名



ること¹²⁾からも明らかである。したがって、友人からの評価を気にし過ぎて、友人との関係に不安や不満を感じていることは、望ましいとはいえないのではないだろうか。

「自己開示」については、構成要素として「表明」、「気持ち」及び「望む」などがあり、親しい友人との間では、自己開示が重要であることを示していると考えた。これに関しては、親密な友人関係は多様な内容を共有している関係であるとされている¹⁰⁾ことから、多様な内容を共有するために、自己開示をして発信をする必要がある。そのため、自己開示によって多様な内容共有を促進することが、親密な友人関係に寄与すると考えられる。

「安心感」については、構成要素として「学校適応感」及び「感覚」があり、安心できる関係が学校適応感に良い影響を与えることを示していると考えた。これに関しては、青年期の友人との信頼関係は「安心」を中心とした関係である¹³⁾といわれており、友人との関係性に安心感を抱いていること、友人がいてくれることで安心感を抱いていることが、中学生の学校適応感と密接に関連するともいわれていること¹⁴⁾からも明らかである。これらのことから、望ましい友人関係を築く上では、安心できる状態であることが重要であると考えられる。

「同調ストレス」については、構成要素として「ストレス」、「ストレッサー」や「過剰適応」などがあり、周囲の目を気にし過ぎて過剰に適応するあまり、ストレスを感じている状態を示していると考えた。これに関しては、友人の目を非常に気にしたり、周りに合わせるなど他者志向的な行動や、その過程で自分を抑えてしまうような振る舞いが、友人に対する過剰適応の特徴とされており、友人に対して、過剰適応状態にある者は、学校適応感が低く、ストレス反応が高い¹⁵⁾といわれていることから明らかである。このことから、周囲の目を気にして同調的な行動をとり、過剰に適応しようとすることは、望ましい友人関係とはいえないと考えられる。

「自己理解」については、構成要素として、「自分自身」、「自己」や「内面」などがあり、親密な友人関係は、自己理解を促進することを示していると考えた。これに関して、友人関係機能尺度において、「学習・自己向上」の因子が示されており、その下位項目には、「Aさんとの関係は、自分自身の成長にとって重要であると思う」や「Aさんとの関係で、新しい自分に気付くことがある」などが挙げられている¹⁶⁾。このこと

から、親しい友人との関係は、自己理解を促す機能があると考えられる。

「群れ」については、構成要素として「距離」、「群れ」及び「志向」があり、集団で集まって群れる関係を示していると考えた。これに関しては、群れの友人関係は、内面的な話題や真剣な議論よりも、活動中心で、内面化の少ない、遊び仲間の関わりに近い性質を持つ¹⁷⁾とされている。このような群れの友人関係では、先に示した自己開示や、多様な内容の共有を行わないため、親密な関係になりづらいと考えられる。

「自尊感情」については、構成要素として「自尊心」、「友人関係期待」や「適応」などがあり、友人に対する期待が、自尊心に良い影響を与えることを示していると考えた。これに関しては、友人関係に高い期待を持つ人は、関係に満足していることにより自尊心を高めるが、低い期待しか持たない人は、関係に満足していても自尊心を高めることがないといわれていること¹⁸⁾からも明らかである。このことから、友人関係においては、自尊感情を高めることも重要な要素であると考えられる。

「親密性」については、構成要素として「深い」、「友情」や「独立」などがあり、深い友情や絆で結ばれているような関係が重要であることを示していると考えた。これに関しては、友人と自分とが親しい間柄であると感じられているほど、自分の能力に対する自信が高く、人と接する上での緊張度も低い¹¹⁾ことが示されている。また、どの学校段階においても、親しい友人との間では自分の意見をはっきり伝え、一緒にいても自分の意思で行動し、友人を信頼して安定した関係であること¹⁹⁾も述べられている。このことから、友人関係においては、親密であることが、自身にとって重要な要素であると考えられた。

以上のことから、抽出された要素を、自分に対して肯定的な影響を与えるかどうかで分類すると、「望ましい友人関係」の要素としては「共有様式」、「自己開示」、「安心感」、「自己理解」、「自尊感情」及び「親密性」が、「望ましくない友人関係」の要素としては「メンタルヘルス」、「不安・不満」、「同調ストレス」及び「群れ」と解釈できると考えられる。

最後に、今後の課題について2点述べる。1点目は、論文数についてである。本研究では、友人関係について扱った22件の論文を分析対象としたが、友人関係について扱った先行研究はこれ以外にも多数存在するため、今後はそのような論文も含めて分析をすることで、友人関係に関する要素をさらに深化させていく必

要があるといえる。2点目は、「親密性」と「メンタルヘルス」の関係についてである。抽出された要素から、親密であることが友人関係において重要であることが示されたが、その反面、友人との関係が親密になり、情緒的に入れ込むことで、メンタルヘルスに影響を及ぼす⁹⁾ともいわれているため、今後、「親密性」の在り方について、さらなる検討が必要であるということである。

文献

- 1) 文部科学省 (2020), 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について。
- 2) 岡田 努 (2007), 大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について。パーソリティ研究, 15, 2, 135-148.
- 3) 田中良仁・吉井健治 (2005), チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響。心理臨床学研究, 23, 1, 98-107.
- 4) 落合良行・佐藤有耕 (1996), 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化。教育心理学研究, 44, 55-65.
- 5) 長沼恭子・落合良行 (1998), 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係。青年心理学研究, 10, 35-47.
- 6) 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994), 青年期の交友関係における同調と心理的距離。教育心理学研究, 42, 21-28.
- 7) 齋藤朗宏 (2011), 「日本におけるテキストマイニングの応用」『The Society for Economic Studies The University of Kitakyusyu Working Paper Series』No. 2011-12
- 8) 末吉美喜 (2019), テキストマイニング入門。オーム社。
- 9) 難波久美子 (2004), 日本における青年期後期の友人関係研究について。名古屋大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 107-116.
- 10) 池田幸恭・葉山大地・高坂康雅・佐藤有耕 (2013), 大学内の友人関係における親密さと共有様式との関係。青年心理学研究, 24, 111-124.
- 11) 朝日香栄・青木紀久代 (2010), 思春期における友人関係の発達の变化-親友関係 Chumship の形成度ならびにメンタルヘルスとの関連から-。カウンセリング研究, 43, 182-191.
- 12) 高坂康雅 (2010), 青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向-青年期における変化と友

- 人関係満足度との関連- 教育心理学研究, 58, 338-347.
- 13) 水野将樹 (2004), 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか-グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮設モデルの生成. 教育心理学研究, 52, 170-185.
- 14) 中井大介 (2016), 中学生の友人に対する信頼感と学校適応感との関連. パーソナリティ研究, 25, 1, 10-25.
- 15) 風間惇希・平石賢二 (2018), 青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討-関係特定性過剰適応尺度 (OAS-RS) の開発を通して-. 青年心理学研究, 30, 1-23.
- 16) 丹野弘昭 (2008), 大学生の内的適応に果たす友人関係機能. 青年心理学研究, 20, 55-69.
- 17) 岡田 努 (1993), 現代青年の友人関係に関する考察. 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 18) 鈴木素子・寺崎正治・金光義弘 (1998), 青年期における友人関係期待と, 現実の友人関係に関する研究. 川崎医療福祉学会誌, 8, 1, 55-64.
- 19) 榎本淳子 (1999), 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, 47, 180-190.

